怪事件奇聞録

かいじけんきぶんろく

吉田悠軌

Extra

竹書房怪談文庫

孔雀

恵美さんがまだ二十歳の頃というから、五十年近く前のことになる。

その日、彼女は茨城の実家のほど近く、とある家の葬式へと向かっていた。

同級生の女友だちが病気で亡くなったのだ。

正直にいうと、この葬儀に参列するのはたいへん気が重かった。

もちろん友人を悼む気持ちはある。しかし二十歳を迎える前の死なんて、あまりにも哀しすぎる。

もともと病弱だった本人は、ずっと覚悟を決めていた。彼女からはいつも、生きることを諦めているような気配が滲みでていた。

それでもご両親は。

とうの昔から宣告されていた死であっても、早すぎる娘の喪失をしっかりと受け止められる親がいるだろうか。

棺に入った女友だちの死に顔よりも、むしろご両親の顔を目の当たりにしたくない。おそらく自分の人生で一度も見たことがないほどの、凄絶で痛ましい表情をしているだろう。

そんな予感が、恵美さんの背中に重くのしかかっていた。

しかし葬儀会場である家の門は、もう目の前に迫っていた。

門外には簡易テントの受付がたてられ、記帳と案内が行われている。

誰もが暗い面持ちをした行列を抜け、恵美さんはゆっくり敷地内へと足を踏み入れた。

母屋の前には、やや大きめの庭が広がっている。日本庭園と呼べるほどではないが、植栽がきちんと手入れされており、個人宅としては立派なものだ。

ただ恵美さんが目を奪われたのは庭のつくりではなく。

「……あれって」

孔雀だった。

色とりどりの羽を堂々と広げた、オスの孔雀。

幅二メートルはあろうかというその飾り羽が、喪服の集団を背景にして、場違いなきらびやかさを誇っている。

え、こんな家の中に、というか茨城に、なんで。

混乱する恵美さんを後目(しりめ)に、孔雀は優雅にその巨大な羽を震わせた。

後で知ったことだが、日本でも鹿児島や沖縄の一部の島では野生化した孔雀が生息しているらしい。また近年では本州各地でも、飼育下から逃げ出した個体が、宅地や山林で目撃される事例も発生している。

しかし五十年前の茨城の一般宅の庭に、こんなものがいるはずない。

いや、そもそも……。

恵美さんは周りを見渡した。

前をゆく弔問客の誰一人として、この鳥に視線を向けていない。

これほど派手派手しい存在が、いっさい目に入っていないのだろうか。全員がひたすら鎮痛な面持ちで庭を抜け、母屋の中へ入っていくばかり。

「あ、ねえ、ちょっと」

列の中に同級生を見かけたので、思わず呼び止めた。

こちらに気づいて黙礼する彼女に向かって。

「ごめん、あれ……見えるよね？」

おずおずと話しかけつつ、後ろを振り返ったところ。

孔雀はどこかへ消えていた。

そこにはもう、なんの変哲もない、少しだけ立派な庭が広がっているだけ。

怪訝な顔の同級生から離れ、恵美さんは参列の最後尾に並びなおした。

どんなに納得がいかなくても、今いるところは友人の葬儀なのだ。きちんと気を取り直し、最期のお別れをしなくてはいけない。

そう思いながら靴を脱ぎ、本会場の広間へと続く廊下を歩いていく。

しかしその途中、ある部屋を横切ったところで足が止まった。

室内を覗いてくれとばかりに、その襖はすべて開け放たれている。

おそらく弔問客たちに、あるものを見てもらおうとの意図があったからだろう。

部屋の中心には衣桁が据えられている。そこにまるで美術品を飾るようにして、一枚の着物が掛けられていた。

長い袂が垂れさがっているので、振袖であるとはすぐに見て取れた。

またそれが親から娘への手向けであろうことも一目で理解できた。もしかしたら一度も袖を通すことなく、この世を去っていった娘への。

しばらくの間、恵美さんは廊下に佇み、その着物を見つめ続けた。

白地にちりばめられたモノクロ調の牡丹。
そこを横切る、緑と金が鮮やかな無数の羽。
孔雀の飾り羽がきらめく、哀しいほど美しい振袖だった。